



北方民族博物館だより

No.83



H3.15 ビーズ装飾付ヘラジカ皮製ゆりかご用カバー
アサバスカインディアン／1910年頃 北米北部 長さ61.5cm

アサバスカインディアンやアルゴンキンインディアンに見られる、乳幼児をくるんで板状のゆりかごにくくりつけるためのカバーです。カバーの中にはおしめ代わりのコケが入られます。この資料にはビーズでイギリス国旗が装飾されています。

- 1 表紙 ビーズ装飾付ヘラジカ皮製ゆりかご用カバー
- 2-4 第26回北方民族文化シンポジウム
- 5 北海道博物館紀行「オホーツクミュージアムえさし こはく＜琥珀を磨いてみよう＞」
／はくぶつかんまつり
- 6 原ひろ子写真展「カナダ・極北の先住民—半世紀前の記録から」
- 7 講座「狩猟採集民から学ぶこと—カナダ・極北の先住民の文化と社会」
／講座「オホーツク文化の終わり頃」
- 8 INFORMATION



第26回北方民族文化シンポジウム

環境変化と先住民の生業文化 —陸域生態系における適応—

2011.10.1- 10.2

会場 オホーツク・文化交流センター

急激に進む地球規模での気候変動や地域的な資源開発は、北方地域の自然環境とそこで暮らす諸民族の文化に大きな影響を与えています。今年の北方民族文化シンポジウムでは、環境変化が北方先住民の生業、特に陸域生態系における陸獣狩猟・漁撈・採集に及ぼす影響と先住民側の対応をテーマとし、2日間にわたって発表と討論を行いました。

以下にそれぞれの発表の概要を紹介します。

第1部：環境変化と生態

座長：吉田睦氏（千葉大学文学部）

「北方先住民における環境変化と生業活動の持続性について」
ジョン・ザイカー氏（ボイシ州立大学文化人類学部）



環極北地域における先住民は、先史時代より多様で時に不確定的な環境に対処してきた。人びとが高緯度地域に居住するようになって以来、極北地域は海水面変化や地盤沈下など大規模な環境変化を経験してきた。また北方地域における産業開発による環境変化は、過去50年の間にトナカイ、魚類、小型狩猟獣などの重要な資源に影響を及ぼしている。こうした変化は、どのように北方先住民の生業活動に影響を及ぼすのだろうか。また、先住民の生業活動は現代でも持続可能なのだろうか。

本発表では、シベリアにおける文献および民族誌調査に基づき、先住民の生業活動の持続性が伝統的生態的知識の展開に依存していることを論じた。伝統的知識とは、特定の資源に関連した行動の鋳型ではなく、社会的関係と社会的安全性を創出し、それによって歴史的に高い回復性を示してきた対話の過程と考えられるのである。

「東シベリアにおける野生トナカイの生息・利用状況と気候変動の影響」

立澤史郎氏（北海道大学大学院文学研究科）



北極圏および亜極北地域には、大規模な季節移動で知られるトナカイが広域分布し、多くの北方先住民がそれを糧として暮らしてきた。しかし近年の急激な気候変動（主に温暖化）は、その生態や生活史を変化させ、「トナカイの民」の暮らしや社会も変容しつつある。

本発表では、ロシア連邦の全国土面積の5分の1を占めるサハ共和国を例に、①野生トナカイの生息実態、②それらの近年の生態変化および気候変動との関係、③野生トナカイの生態変化が先住民の生活や社会に及ぼす影響、について報告した。

次に、とりわけ野生トナカイが著しい密度変動を示しているアナバル川水系（オレニョク地方）で発表者らがやっている移動追跡調査の結果から、野生トナカイの移動傾向の変動を示し、その要因と利用（保全・管理）の問題点を整理し、先住民社会の対応策について検討した。

第2部：現代の狩猟採集民と開発

座長：高倉浩樹氏（東北大学東北アジア研究センター）

「アラスカ先住民の石油開発/環境汚染への対応」
井上敏昭氏（城西国際大学福祉総合学部）



アメリカ合衆国アラスカ州では、20世紀以降、非先住民による地下資源開発や水産資源の利用（及びそれに抗する「自然保護」活動）が活発に行われ、先住民権に関する法もそれに大きく影響されながら整備された。つまりこれらの活動は、先住民の生活環境だけでなく、彼らが文化を維持する社会環境をも変化させてきたといえる。さらに20世紀後半からは、資源の開発・利用を巡る対立の構図が

より拡大化・複雑化し、先住民の民族集団が単一で解決することが困難な状況となっている。

本発表では、北極海沿岸での石油開発を巡る事例と、ユーコン川の環境回復・資源管理を図る流域の先住民連合の事例を取り上げ、そのような社会環境の変化に対する先住民の対応、その背景にある戦略や活動原理、この地の先住民にとって「変化に対応する」ということはいかなることかについて考察した。

「西シベリア・トナカイ牧畜民＝ツンドラ・ネネツの採捕活動と環境変化」

吉田睦氏（千葉大学文学部）



西シベリア北部ツンドラ地帯を遊牧範囲とするシベリア・ネネツのトナカイ牧畜民は、採捕活動にも依存することを生存戦略としてきた。なかでもヤマルネネツ自治管内の個人経営者は、自家消費活動としての漁労、狩猟、採集に複合的に従事することで、過去1世紀にわたる変革期を乗り越えてきた。これらの採捕活動の中で、特に漁労は、多くの個人経営者にとって日常的な食糧源であり、野鳥・野禽類は季節的な補助食糧源や現金収入源としての役割を果たしている。

近年の地下資源開発（天然ガス・石油）による土地の荒廃や収奪は、この地域では深刻な問題である。また気候変動による環境変化は、家畜トナカイのみならず、採捕対象としての野生動植物の生態にも影響を与えていると考えられる。これらの影響の評価は今後の課題だが、生活・生業体系全体として、先住民社会のレジリエンスや脆弱性の問題を分析することが必要といえるだろう。

「アイヌ文化と沙流川総合開発」

貝澤耕一氏（NPO法人ナショナルトラスト・チコロナイ）・岩崎まさみ氏（北海学園大学人文学部）

北海道日高地方の沙流川流域には現在も多くのアイヌが住むことで知られている。その中心地に建設されたダムに反対して起こされた裁判の判決により、1997年に司法の場で始めてアイヌ民族の文化享有権、および先住性が認められたことは人々の記憶に新しい。



その出来事から数年後の2001年には、沙流川支流の額平川に第二のダム、「平取ダム」が建設される計画が明らかになった。二風谷ダム判決を受けて、第二のダム建設が地域のアイヌ文化継承活動に及ぼす影響を調査し、その影響緩和策を検討する作業が始められた。

本発表では、5年間の社会影響評価の概要と、その調査結果、さらにその後の経過をまとめ、開発事業と先住民文化の継承における課題について検討した。

第3部：環境変化と狩猟採集文化史

座長：岡庭義行氏（帯広大谷短期大学）

「環境変動と北方狩猟採集民文化の形成過程」

加藤博文氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）



人類の歴史は、気候変動と地球上の多様な環境への適応の歴史とみることができる。人類史の初期段階において、人類集団は大陸から大陸へ、そして島嶼へと移住し、さらに内陸から海洋へと多様な環境へ適応してきた。そして現在、狩猟採集民文化は、赤道から極地にまで広がっている。この人類の環境適応の歴史には、いくつかの障壁と転換点が存在した。その一つは季節的環境変化の大きな北方圏への進出であり、もう一つは海洋環境への適応であった。これら二つの環境への適応行動は、狩猟採集民文化をより多様なものへと発展させていった。

本発表では、シベリア地域と太平洋沿岸地域に焦点をあて、気候変動が先史狩猟採集民文化にどのような影響を与え、新たな文化の形成と結びついたのかについて検討した。

「環日本海北部地域における後期旧石器時代の環境変動と
先史狩猟採集民の生業適応」

佐藤宏之氏（東京大学大学院人文社会系研究科）



ロシア極東、中国東北部、朝鮮半島および日本から構成される環日本海地域の北半分を環日本海北部地域と呼ぶ。

環日本海地域は、先史時代において考古学的まとまりを形成していたことが明らかであるが、さらに北部地域では、列島が海洋性気候になる以前の氷期の後期旧石器時代においては、北海道が大陸と陸接して半島を形成し、しかも大陸性気候下にあったため、細石刃文化に代表される高い文化的共通性が認められる。こうした考古学的現象は、自然環境の共通性と変動が生み出した資源に対する人間の技術的な適応行動に起因している。

本発表では、対象地域・時代の考古学資料の特性と分解能を踏まえ、気候、景観、植物相、動物相、文化といった諸要素からなる人類生態系アプローチに基づいて、旧石器時代の先史狩猟採集民の生業適応の様態を、自然と人間の相互作用という観点から明らかにした。

第4部：現代の狩猟採集民と気候変動

座長：岩崎まさみ（北海学園大学人文学部）

「ユーコン北部における生業活動に対する気候変動の影響と適応」

ジョー・リンクレーター氏（グイッチン国際評議会）



グイッチンは、何千年も前から、アラスカ北東部、カナダのユーコン準州北部、北西準州北西部の広大な地域に居住してきた。グイッチンは、今日まで、常にその土地やそこに住む生物と特別な関係を保ってきた。しかし現在、彼

らの土地は足元で変化し続けている。

グイッチンは周囲の変化する世界に適応してきたが、さまざまな変化は現在も起こり続けている。現代のグイッチンにとって最大の問題の一つは、急激な気候変動に対し、狩猟採集民としての文化的アイデンティティを維持しつつ、どのように適応するかということである。

グイッチンは、伝統的知識、科学的知識、最新技術の融合によって、気候変動に関連して彼らの生活を脅かす問題に立ち向かおうとしている。グイッチンは気候変動の影響を理解するために科学者と協同し、北極評議会での活動を通じて、国家レベル、国際レベルにおける政策変化をもたらすために政府と協同している。

「カナダ、ユーコン準州における気候変動に対する先住民の認識と対応」

山口末花子氏（東北大学東北アジア研究センター）



カナダ、ユーコン準州では1990年頃から、永久凍土や氷河の融解、洪水や山火事の頻発、動植物の分布域変化など、気候変動、特に温暖化の影響とみられる自然の変化が報告されている。狩猟採集が現在も重要な生業の一つであるユーコン先住民は、こうした変化にいち早く気付くとともに、様々な対応をとってきた。

ただしそれは単なる変化への警鐘というだけでなく、神話のなかで語られてきた洪水や小氷河期の記憶を呼び起こすものでもある。

また、伝統的に移住生活をしてきた社会では柔軟に対応できていた部分が、定住化によって重大な被害を受けるようになるなど、社会の変化によってこれまでの知識では対応しきれない事例もでてきている。こうした現状について、実際の河川洪水などの事例を中心に報告した。

* * *

それぞれの発表に対して他の発表者や運営委員、会場から質問やコメントが出され、活発な質疑や討論が行われました。

なお、9月30日には、同センターのエコーホールで、シンポジウム関連事業として「星野道夫 ALASKA 星のような物語・感受編」上映会を行い、248名の方にご来場いただきました。
(主任学芸員 中田 篤)

北海道博物館紀行

オホーツクミュージアムえさし ＜琥珀を磨いてみよう＞

2011.10.15

講師 高島孝宗氏

(オホーツクミュージアムえさし学芸員)

「北海道博物館紀行」は道内の博物館を紹介する事業です。今回は枝幸町のオホーツクミュージアムえさしの高島孝宗氏を講師に迎え、主に同館が積極的に取り組んでいる発掘のお話と琥珀磨きのご指導をお願いしました。



最初に、枝幸町にある目梨泊遺跡について解説していただきました。目梨泊遺跡はおよそ1200年前のオホーツク文化を担った人びとによる遺跡で、竪穴住居址や墓が数多く発見されています。網走のモロロ貝塚がオホーツク文化前半期の交易拠点なら、目梨泊遺跡は後期の拠点であった可能性が高いそうです。また、目梨泊遺跡からは大陸で製作された青銅製帯飾りが出土しており、国指定重要文化財となっているそうです。

さらに、同館では1400万年前（中期中新世）に生息していたデスモスチルスという哺乳類の化石の発掘を行っていることも紹介されました。

これらのお話の後に琥珀磨きの体験を行いました。琥珀は、縄文文化期やオホーツク文化期の遺跡から出土しており、装飾品として使用されたものです。枝幸町でも出土していますが、隣の浜頓別町からは首飾りとしてまとまって出土しているそうです。

琥珀にはおよそ1万年前の若い琥珀「コーパル」を使用しました。コーパルは木の樹脂が化石になった非常に硬いものです。コーパルには当時の昆虫、蚊やハエなどが閉じ込められていることがあり、大昔のタイムカプセルのようなものです。

参加者の皆さんは、コーパルを水につけながら耐水ペーパーで表面がすべすべになるまで1時間くらいかけて磨き上げました。そのあと、高島さんが用意してくださった顕微鏡で、コーパルの内部を観察しました。残念ながらコーパルのなかに当時の昆虫が入っていない場合もありましたが、高島さんが持参したコーパルのなかの昆虫を見て、参加者の皆さんは大変驚いていました。

(学芸員 角 達之助)

はくぶつかんまつり

2011.11.3

芸術の秋、読書の秋。秋には何かと、文化的な雰囲気があります。だから文化的な施設の当館もこの時期に多くの来館者に来てもらおうと、あれやこれやと職員一同で考えました。

そこで私たちは思いつきました。「はくぶつかんまつり」の開催です。今年で3回目を迎えます。今年、ポート・アルバーニファンクラブの皆さんや、東京農業大学の学生さんたちにもお手伝いいただきました。

まつり会場では、北方民族にちなんだ食、例えばさけ鍋やクジラ汁、カナダのメープルシロップをたっぷりかけたホットケーキなどを販売しました。また屋外にはモンゴルの小型のゲルを建て、モンゴル衣装に身を包んでの記念撮影をしてもらいました。さらには標的めがけて投槍器を投げるゲームや、東京農業大学全学応援団吹奏楽部によるミニコンサートなど、盛りだくさんの内容で来館者を呼び込みました。

もちろん常設展示やロビー展もご覧いただけたと思います。また、屋内で行った北方の遊び、知恵の輪やイヌイトヨーヨー、ウイлтаのやじろべえのコーナーも人気がありました。

今年は去年より多く、600名を超える来館者にお越しいただきました。来年も「はくぶつかんまつり」は行います。さらに工夫をこらし、皆さんに親しんでいただける博物館になりたいと思っています。来年もどうぞお楽しみに。

(学芸員 角 達之助)



屋外の「モンゴル衣装体験コーナー」(上)
と多くのお客さんと賑わう食事スペース(下)

写真展

原ひろ子写真展 カナダ・極北の先住民
—半世紀前の記録から

2011.11.1- 12.8

原ひろ子氏は、ジェンダー研究を専門とする文化人類学者です。今からちょうど50年前、文化人類学を専攻する大学院生だった原氏は、カナダ極北地域の先住民カショーゴティネ（ヘヤー・インディアン）の社会に入り、現地調査を行いました。原氏から寄贈された写真による本写真展では、狩猟や漁労、採集に強く依存していた1960年代前半当時のカショーゴティネの生活や文化を紹介しています。

カショーゴティネ（K'asho Got'ine）は、カナダ北西部の極北地域に居住してきた民族集団です。主な生業は狩猟と河川・湖沼における漁労、採集でしたが、森林の北限に近い彼らの居住地は植生が貧弱なため、大型獣が少なく、ノウサギが重要な食物となっていました。以前はヘヤー・インディアン（Hare Indians）と呼ばれていましたが、その名の由来は、彼らがノウサギ（ヘヤー hare）に強く依存してきたからだと考えられています。かつては飢えとの戦いが日常的であったとされ、人びとは獲物をもとめて小グループごとに広範な地域を移動する生活を送ってきました。

近代以降、毛皮交易の浸透、キリスト教の布教などによって、交易所となっていたフォート・グッド・ホープ周辺への季節的な居住が始まり、1960年代以降は学校教育制度の整備や政府の政策によって定住化が進みました。



河で魚捕り

本写真展では、40枚のモノクロ写真を大きく五つのコーナーに分けて展示しました。

まず、カショーゴティネの人びとが暮らしていた極北の環境を身近に感じていただくことを意図し、果てしなく広がる北方林やマッケンジー河の断崖、物資を届ける水上飛行機など、風景を撮影した写真を展示しました。

次に漁労に関連する写真を展示しました。網を繕う人やカヌーで刺し網漁をする人びと、魚の加工や保存の様子などから、カショーゴティネの人びとの日常的な漁労の光景が伝わったのではないかと思います。



水を運ぶ少年たち

続いて狩猟に関連する写真を展示しました。本格的な狩猟の写真はなかったのですが、猟に出かける男性の楽しい表情や毛皮加工をおこなう女性たちの姿を通じて、彼らにとっての狩猟の意義を感じていただければと考えました。

そして子どもたちの写真を集めたコーナーを作りました。遊んだり、働いたりしている子どもたちの表情は活き活きとしていて、原氏が子どもたちと親密なつながりを作っていたことを感じさせてくれます。



犬の背に荷物を積む

最後に、犬とのふれあいや利用の様子などを紹介する写真を集めました。カショーゴティネにとって、犬は愛情を注ぐ相手であると同時に、犬ぞりを曳かせたりする労働力として重要な存在でした。現代の日本とは違った人と犬との関わりを感じていただけたのではないかと思います。

その他、「図書閲覧コーナー」を設け、カショーゴティネやその他のテーマに関する原氏の著書のほか、北方インディアン関係の書籍を置き、自由にご覧になれるように工夫しました。

（主任学芸員 中田 篤）

講座

狩猟採集民から学ぶこと —カナダ・極北の先住民の文化と社会

2011.11.6

講師 原 ひろ子氏（城西国際大学教授）

原ひろ子写真展
「カナダ・極北の
先住民—半世紀前
の記録から」の関
連事業として、写
真撮影時のエポ
ソードや当時のカ
ショーゴティネの
生活や文化につい
て解説していただ
きました。



講座では、まず、原氏がカショーゴティネの調査に赴くに至った経緯についてのお話がありました。原氏は、第二次世界大戦後の困難な時代をソウルで過ごし、極限状態に置かれた人間がそうした状況にどのように対処するのかについて考えるようになったそうです。大学で文化人類学を専攻し、極限地域に生きる人びとの生活や文化に興味を抱くようになり、アメリカの大学院への進学後、厳しい環境に適応してきた人びととしてカナダの極北地域に住むカショーゴティネを調査対象とすることになったのです。

次に写真展で展示されている写真をプロジェクターで投影しながら、それぞれの写真の背景や関連することがらについて説明されました。集落の写真では、それまで季節的に暮らしていた場所で1960年代以降に定住化が進んだこと、かんじきの写真では、雪の深さに応じて数種類のかんじきが使い分けられること、ウサギの毛皮製衣服の写真では、暖かいけれど毛が抜けやすいことなど、その時期、その場所に居合わせた人ならではの興味深い話を披露してくださいました。

さらに男女分業が明確でなく、できる人ができることをやるということ、うわさ（口コミ）が正確で、伝わっていく過程であまり内容が変化しないこと、人間は一人で生きているという考えが強く、他人の意見はなかなか聞き入れないこと、守護霊との対話によってものごとを判断することなど、当時のカショーゴティネ社会や文化の特徴について紹介されました。

参加者は、現代の日本人とは大きく異なる当時のカショーゴティネの宗教観や家族観に興味を惹かれた様子でした。

（主任学芸員 中田 篤）

講座

オホーツク文化の終わり頃

2011.11.26

講師 角 達之助（当館学芸員）

オホーツク文化の終わり頃を紹介するにあたって、まずオホーツク文化中期（7世紀頃）から貼付文期（10世紀頃）と時代が下るにつれてどのように変化していったのかを説明しました。

刻文期の頃のオホーツク文化は、サハリン・北海道・千島列島にまで広がっていました。しかし、竪穴住居址などの確かな遺構の存在は道北部に偏っており、刻文土器は他の遺跡に混じって発見される程度でした。しかし、当館で2005年から発掘した能取岬西岸遺跡が刻文期の遺跡であったことから、これをモデルケースとして、後の貼付文期への変化を見てゆきました。

まず、刻文期の住居は貼付文期の住居に比べると小さく、壁も低く、造りが簡単であることや、遺物が少ないことから、この時期は移動性が高かったと考えられます。貼付文期の前半では、家の造りも頑丈で、棟木を持つような家の作りをしており、何度か同じ場所で改築された痕跡が残っていること、また遺物が非常に多いことから、刻文期に比べると定住性が高くなったと考えられます。また、刻文期では石鏃に様々な石材が使われていたのに対し、貼付文期では黒曜石に統一されてゆきます。

貼付文期後半になると、竪穴住居址の同地点での改築がなくなり、住居構造に変化が見られます。また、この頃になると、オホーツク式土器の文様態が口の部分から頸部、胴部までと幅広く施文されるようになります。この施文方法はトビニタイ文化へと引き継がれてゆきます。

トビニタイ文化とは、オホーツク文化とアイヌ文化の先祖とされる擦文文化が融合した折衷文化です。トビニタイ文化は遺跡の立地状況が擦文文化に近く、速やかに擦文文化へと移行すると考えられそうです。しかし、擦文文化の高坏（13世紀頃から出土）の有無によって、トビニタイ式土器を分けることができ、高坏が共に出土しないトビニタイ式土器はオホーツク文化の要素を色濃く残し、共に出土するようになって次第に擦文文化の要素が強くなることを示しました。そして漆碗や鉄鍋が使用されるようになるとアイヌ文化へと移行してゆきます。したがって、トビニタイ土器が出土する道東部では、ゆるやかにオホーツク文化から擦文文化へ、そしてアイヌ文化へと移行してゆくため、道東部のアイヌ文化にはオホーツク文化の要素が残されている可能性を紹介しました。

（学芸員 角 達之助）

企画展

ミニチュアでみる世界の台所事情

建築家・宮崎玲子氏がヨーロッパや、日本を含むアジアのさまざまな国や民族の台所を忠実に再現した多数の住居模型を展示します。

会期 平成24年2月4日（土）～4月8日（日）

会場 北海道立北方民族博物館 特別展示室

観覧無料

関連事業

講話とギャラリートーク：世界の台所事情

日時 平成24年2月4日（土）午後1時30分～3時

講師 宮崎玲子氏（民族建築家）



イタリア・トスカーナ地方の台所

INFORMATION

調査報告

◆11月8日（火）～12日（土）、網走市能取岬西岸遺跡の発掘を行いました。（担当：角達之助学芸員）

職員の異動等

〔採用〕

学芸員 山田祥子

行事報告

◆10月8日（土）、親子講習会「親子で楽しむカムチャツカ風サケ料理」（講師：渡部裕学芸員）を開催しました。カムチャツカ先住民に伝わる水餃子（ペリメニ）とスープを作りました。

◆11月23日（水・祝）。「あばしりまなび塾フェスティバル」（同実行委員会主催、於：オホーツク・文化交流センター）に出展しました。当館のコーナーには150名を超える参加者が来場し、「革のストラップづくり」を楽しみました。

◆11～12月、ミュージアムスクールを開催し、網走市の呼人小学校、南小学校、西が丘小学校、東小学校の4年生が参加しました。各二日間のプログラムで、一日目は小学校での講座、二日目は来館して展示見学および革の写真入れづくりをしました。できあがった作品は、参加した児童自らの手で当館ロビーに展示されました。



なお、本事業には昨年度に引き続き（財）山田青少年育成財団の援助をいただいております。

◆11月12日（土）～12月18日（日）に生活工房ギャラリー（東京・世田谷）で開催された「北極海とイヌイトの壁かけ」展（（公財）せたがや文化財団主催）で、当館の壁かけ他37点が展示されました。

12月4日（日）には、その関連イベントで笹倉いる美学芸主幹が上映会&ミニワークショップ「イヌイトの暮らしと遊び」を行いました。イヌイトの暮らしを描いた映像を見たあと、イヌイト・ヨーヨーを作りました。

北方民族博物館だより
No.83

平成23(2011)年12月22日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

財団法人北方文化振興協会